

リフター導入「抱え上げない介護」で腰痛ゼロ 佐賀・多久市の「天寿荘」

6/10(日) 15:00配信

佐賀新聞LIVE



リフターと呼ばれる機器を使って入所者を車いすからベッドに移乗する職員＝多久市の天寿荘

介護現場で職員の腰痛予防が課題となる中、2014年以降、腰痛発症がゼロとなっている介護施設が佐賀県内にある。佐賀県多久市の特別養護老人ホーム「天寿荘」は、入所者を人力で抱え上げない「ノーリフティング介護」を実践している。佐賀労働局も労災防止の観点から推奨するが、設備投資や職員の意識改革に課題があり、浸透していない。

5月中旬、天寿荘。「お休みしましょうか。動かしませぬ」。介護職員の里石愛美さん（26）が、車いすの女性（97）に声をかけた。リフターと呼ばれる機器と、女性の下に敷かれているシートの両端を固定すると、体がゆっくり持ち上がった。ベッドに移し、慎重に降ろす。「ありがとう」。移乗は数分で完了した。

介護現場では、人力で利用者を抱え上げることが原因で腰痛を発症するケースが多く、職業病とも言われる。県によると、18年4月の県内の介護職員数は約1万3600人（推計値）。佐賀労働局によると、17年の社会福祉施設における4日間以上の休業を伴う労災件数は94件で、このうち約20件は腰痛だった。

同施設でも介護職約40人のうち、半数が腰痛を抱えていた。毎年1、2人が腰痛で離職。人手不足に拍車をかけ、現場は疲弊した。

経営側も職員も危機感を強め、腰痛予防として14年度にリフター7台を導入した。当初は職員の間「手で抱えた方が早い」との意見もあったが、実践して懸念は消えた。人力では職員2人が必要だが、リフターを使えば職員の体格にかかわらず1人で介助でき、慣れれば効率化につながる。入所者や家族にも体験してもらい理解を得た。

現在はリフター10台を配備し、「抱え上げない」を原則にしている。専用シートなどもそろえるため、設備投資に「数百万円以上かかった」（同施設）が、諸隈博子施設長（76）は「離職が何よりも困る。費用はかかったが、それ以上に導入して良かった」と話す。

県社会福祉協議会によると、佐賀県内で定着しているのは天寿荘だけ。設備投資と職員の意識改革が浸透の障壁となっている。

先進的に取り組む高知県は、16年度に「ノーリフティングケア宣言」を掲げた。独自の助成制度を設け、職員や管理者の意識改革を進めた。離職率は減り、逆に就職希望者は増加。拘縮など利用者の二次障害や擦り傷も減り、「もう人力には戻れない」（同県）。

現在、厚生労働省は雇用保険適用事業所に対し、150万円を上限に助成している。佐賀労働局は「抱え上げない介護を広げるため、啓発を考えたい」としている。